あったかいがいいね

シャローム横浜通信 5月号

新人職員を迎えて

ものみな春の装いとなりましたが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか。

シャローム横浜の敷地内の桜も例年と比較すると開花時期は非常に遅くなっていますが、ようやく満開となり、多くの皆様を楽しませてくれています。

アドベンチスト福祉会では、4月初めに入職式を無事に執り行うことができ、昨年度の入職者数は34名と非常に多くの職員を迎えることができました。そのうちシャローム横浜は22名を中途採用しており、現在様々な部署で活躍しています。

特養の介護現場は交代制で勤務をしており、24時間ご利用者の生活を支えています。退職者が出ると他の職員の負担が増えるため、急な人材不足にも対応できるよう、業務内容の見直しやマニュアルの作成等の業務改善を進めています。

最近実家の片づけをした際に、義母が生前書き留めていた言葉を見つけました。その言葉を皆様に贈りたいと思います。

一番を目指すのではなく、特別を目指す。

それだけで誰よりも輝いてみえるものです。
それぞれの心に種を蒔き合い、お互いの心に花を咲かす。
ずっと ずっとそんな関係でいられたらいいな。
好きな道を歩けばいいよ。
まるっきり無駄な回り道なんて絶対にないんだから。
面白おかしく生きる。

この言葉は義母が生前に自分のこと、子供や孫たちのことを思って書いたのだと思います。特別を目指して輝いてほしい、人との繋がりを大切にして自分らしい道を歩んでほしいとの想いが込められています。

22名の職員がこのシャローム横浜を選んでくださったことに感謝しております。職場においては様々なことがあると思いますが、職員、ご利用者やご家族、地域との関係性の中で自分自身を成長させ、お互いの心に花を咲かして共に人生を豊かにすることで、それぞれが輝く場所であってほしいと願っています。

皆様の上に平和な日々が続きますようお祈りいたします。

施設長　髙原 信夫

大池公園での心温まるひととき

ひまわり（デイサービス）では3月中旬に大池公園へ出かけました。暖かい日差しの中、水面をスーっと泳ぐガチョウを見て、皆様微笑んでいました。また、ご利用者同士の新しい関わりや、助け合う姿も見られ、穏やかな気持ちが積極的に出ていました。

外へ出ることによって、こんなに人が相手に対して思いやりを持って接するようになるとは、自然が人の心に与える影響の素晴らしさを感じました。

ひまわり主任　池原 雅彦

第285号
令和6年4月15日発行
（毎月1回15日発行）

責任者：施設長　髙原信夫
〒241-0802
横浜市旭区上川井町 1988
社会福祉法人アドベンチスト福祉会
シャローム横浜

編集委員
荒金・石川・石橋
☎045-922-7333

https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/

シャローム横浜からの春のお便り

シャローム横浜では、ご利用者の皆様に心を込めたサービスを提供し、快適な毎日をお過ごしいただけるよう努めています。また、様々なイベントを通じて、楽しいひとときを過ごしていただける機会も提供しています。

私はシャローム横浜通信の編集委員として、日常の風景やイベントの様子、そして施設の魅力を皆様にお届けする役割を担っております。今後も、有意義な情報をお届けできるよう努めてまいります。

シャローム横浜通信へのご愛読と、シャローム横浜への変わらぬご支援を心よりお願い申し上げます。

シャローム横浜通信編集委員　石橋 湧

今年度の栄養課主催の行事を紹介いたします

お弁当盛り付けの様子

5月　5日（日）ピザパーティー
6月１6日（日）海鮮屋台
7月　7日（日）夏野菜収穫祭
8月　4日（日）あんみつ
9月　1日（日）ピザパーティー
１0月　6日（日）ラーメン屋台
１1月　3日（日）焼き芋
１2月２5日（水）クリスマスディナー
1月　1日（水）正月祝い膳
2月　2日（日）デザートの日
3月　2日（日）ラーメン屋台

今年度もどうぞよろしくお願い致します。

栄養課課長　小寺 秀偉

お伊勢参りを通して思ったこと

第 193 回　チャプレン　上前 至

今年の３月末、金婚式の祝いを兼ねて伊勢志摩への旅行を挙行した。といってもそんな大げさなことではなく子供達が計画してくれたことに私達夫婦は乗っかっただけのことではあるが。行ってみて伊勢志摩国立公園の手付かずの日本の自然の美しさに魅せられた旅でもあった。なんといってもそこには伊勢神宮が存在する。その外宮、内宮に、そこに厳然と存在する樹齢 1500 年を超える古木に囲まれた静寂な園内に峻厳たる想いを感じるのは私だけであろうか。その正宮に鎮座される神は天照大御神であり日本人の総氏神様とされる神でもある。その神様を拝む、拝まないかは別として私はそこに日本人のルーツ、日本文化の核を感じさせられた。私はキリスト教徒であるが日本人としてそうした存在があることを知っておく事は大切なことではないかと思えた。

江戸時代、領民は自分の国から外へ出る事は領主の許可がなければそうそうできないことであった。そうした時代に、お伊勢参りは、一生に一度は行っておくべき所として公に許可されていたのである。領主もそれを禁止することはできなかった。当時の庶民にとって、それは今日の外国旅行に出かける事と同じ意味を持っていたとされる。そのための費用を共同で出し合っていたという。その旅をとおして他国の様子を知り、互いの助け合いを通して日本文化も育っていったのではないか。そこに私は日本文化のルーツを見るのである。国学者、本居宣長は 1625 年２か月の間に 400 万人の参拝者があったという。当時の人口が 3000 万人であれば７人に１人は参拝していた事になる。まさに日本文化の核がそこにあったといえるのではないか。(ローマ人への手紙２章 14 節参照)